

# 会議・視察報告

## 第13回中国韓国学国際シンポジウム

ERINA 調査研究部研究主任 朱永浩

2012年11月7～8日、中国広州市において、第13回中国韓国学国際シンポジウム（中山大学韓国研究所主催、韓国国際交流財団後援）が開催された。中国の韓国学分野で最も権威のあるこの国際シンポジウムは、1995年に「韓国伝統文化国際学術シンポジウム」という名称でスタートし、2005年まで隔年開催されていたが、それ以降は毎年開催となり、2009年からは会議名称を「中国韓国学国際シンポジウム」と改めた。13回目となる今回のシンポジウムには、中国、韓国、日本、香港、マカオから合わせて150名余りの参加者があり、ERINAからは三村光弘調査研究部長と筆者が参加した。

11月7日午前に行われたオープニングセレモニー・全体討論では、まず、中山大学副学長、在広州韓国総領事館総領事、韓国国際交流財団韓国学事業部長より開会の挨拶がなされた（写真）。続いて、中山大学アジア太平洋地域研究院長の濱下武志氏による「東アジアにおける沿海都市間ネットワークの歴史の変遷」、北京大学韓国研究センター主任の沈定昌氏による「中韓国交樹立以来20年間の両国関係の現状と課題」、韓国関東大学東亜研究センター主任の李奎泰氏による「韓中関係20年：事実とコンプレックス」、延辺大学教授の徐東日氏による「朝鮮王朝『使華録』の中の中国認識の研究に関する諸論点」、復旦大学韓国研究センター主任の石源華氏による「韓国研究の20年：成果、問

題と展望」、中山大学韓国研究所長の魏志江氏による「中韓関係史研究に関する幾つかの理論問題」と題する基調講演が行われた。6名の講演内容は広範に及び、報告時間が20分という短い時間ではあったが、中韓の政治・経済関係および歴史認識に視座を置き、各自の研究領域において韓国学研究が取り組むべき課題が示された。その後、フロアからも活発に意見が出され、報告者との間で1時間半にわたる熱い議論が交わされた。

11月7日の午後と8日には、「政治外交」、「経済社会」、「歴史文化」の3つのテーマセッションが3カ所の会場でほぼ同時並行的に行われた。残念ながら、ERINAの2名は「経済社会」セッションの司会、総括担当に指名されたため、他セッションの興味深いテーマの報告を聴講することができなかった。

筆者が参加した「経済社会」セッションでは、中韓経済関係、韓国の産業・貿易（エネルギー、物流、コンテンツなど）、南北問題、北朝鮮経済、東アジア地域協力、韓国の高等教育、知識人、華僑について、それぞれ経済学、社会学、国際関係学等の観点から22本の研究報告が行われた。なお、ERINAからは、三村調査研究部長が「北朝鮮の新政権の経済政策と対外経済関係」、筆者が「韓流マーケティング戦略及びその経済波及効果の分析」と題する報告を行った。

セッション全体としては、各研究領域における韓国研究の中国研究者層の厚さを実感しながらも、異分野の交流がやっと始まった感がある。また、様々な研究分野の中で、2012年は中韓国交樹立20周年と中韓友好交流年に当たる節目の年であったため、中韓経済関係20年の総括に焦点を合わせた報告が多く見受けられた。このほか、北朝鮮経済の現状及び韓国の対北朝鮮政策への関心の高さもうかがえた。

8日夕方に行われた閉会式では、各テーマセッションの総括及び主催者閉会挨拶があったほか、遼寧大学（瀋陽市）が第14回目、浙江大学（杭州市）が第15回目の主催者となることも発表された。この国際シンポジウムは、中国での韓国研究動向を知るうえで重要な位置にあり、今後の一層の発展が期待される。

### 第13回中国韓国学国際シンポジウム開幕式



（出所）筆者撮影